

# 魚津の教育

魚津市教育センターだより173号  
令和6年3月 発行  
魚津市教育センター  
魚津市村木町1番21号  
〒937-0053 TEL(0765)23-9161

## 「感謝と喜び」

東部中学校 校長 上田 靖

間もなく40年近い教員生活が終わります。その実感はないものの、これまで多くの子供たちや保護者、地域の方々、そして、教職員の皆さんと出会い、共に過ごした出来事を思い出します。

生意気にも自信满满で勤め出した新採当初、先輩教師が喫茶店へ誘ってくれました。当時は単なる世間話と捉えていましたが、きっと「今年の新採は大丈夫か？」という危惧から、私のやる気を削がないようさりげなく教員としての心構えを話してくれたのだと、自分が先輩の立場になった頃ようやく気付きました。それ以降、自分のことを見守り、励まし、助けてくれる方々の存在に感謝してきました。



教えすぎてつまらない授業に悩んでいた時、「ほとんどの子供は、教師より優れていると思って間違いない」との先輩の言葉から、生徒の学びたいという気持ちを信じて授業するよう心がけました。それ以降私自身は楽しく喜びながら授業をしてきましたが、本稿を目にしている教え子の皆さんは、数学を少しは好きになったでしょうか。

生徒指導で悩み自己憐憫れんびんに陥っている時、大先輩から「春に咲く桜は、気温の低い時期に寒い北風にさらされた蕾の方が美しい花びらを開かせる。暖冬のときには、色合いが悪く花びらもピンと張らないもの。寒風に耐え抜いている間に、自分を美しく装う準備をしている」と聞き、桜を生徒や自分自身に置き換え、己の力量のなさを責任転嫁するのではなく、生徒の悩みや苦しみに寄り添いながらその将来の開花を願って踏ん張る気持ちになりました。

また、決めつけないことの大切さを学んだことがあります。「偉大な横綱を生んでいる両国国技館の住所は、東京都墨田区横●一丁目です。●に当てはまる漢字は何でしょう。それは、「綱」ではなく「網」です。同僚との何気ないやりとりから学んだことですが、私は、つい先入観で判断してしまいます。それでは解決が困難な出来事に正しく対処することはできません。

私の好きなフレーズは、「すべてのことに感謝する」ということ、また、「いつも喜んでいる」ということです。長きにわたり教員を続けることができたのは、このように多くの方々優しく温かく支えてくださったおかげと「感謝」します。また、こうした日々の思い出は、今、「喜び」となっています。かつてノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサが、「『思考』がよいものであればそれがよい『言葉』となり、よい『行動』に移り、自分の『習慣』、『性格』、さらには、『運命』までもよいものへと導く」と言いました。この最初の『思考』を『感謝と喜び』を中心としたものとし、どんなことにも感謝しながら、いつも喜びを探し出す姿勢を保ち続けることで、今後も、きっと、充実した生活を送ることができると思います。皆さんもいかがですか。

## ■内地留学研修を終えて

令和5年度 特別支援教育内地留学(専修コース)

■期間:令和5年10月1日～11月30日 場所:富山県総合教育センター教育相談部

### 「通級指導教室の役割」

清流小学校 <sup>たきもと</sup> 瀧本 <sup>かずとし</sup> 和敏

通級指導教室を担当して6年目を迎え、通級指導教室の運営に対して自信をもてるようになってきた反面、担当している児童が一齐授業に参加できなかったり友達との関わりの中でトラブルがあったりする姿を見て、児童の課題となっている部分が改善されていないと感じることもありました。また、通級による指導の内容について「児童が本当に必要としている力を付けるための内容になっているのか」と疑問に感じることもあり、児童だけではなく保護者や教職員のためにも、高い専門性を身に付けていかねばならないと思っていた時期に、富山県総合教育センターでの研修の機会をいただきました。

10月からの2か月間の研修では、「通級指導教室での学びを通常の学級に生かすには」ということをテーマにして、通級指導教室の役割や児童へのアセスメント、個別の指導計画の見直し等、通級による指導の在り方について広く考えることができました。特に、現場を離れ、これまでの取組を振り返り整理することで気が付いた、「通級指導教室は児童が通常の学級で学ぶための、自分に合った学び方を見付ける場所である」という意識は、今の私に最も必要なことだったと思います。また、複数の教職員で行った「話し合いによるアセスメント」は、児童の実態を共通理解し、指導の方向性や具体的な支援を考える際にとっても有効な手段であると感じました。各学校にお配りした報告書にも詳しく書いてありますので、是非ご覧ください。

今後も、それぞれの児童について、多面的なアセスメントの実施や目標と手立ての見直し等、すべきことは多いですが、この2か月で学んだことを児童や保護者、教職員のために生かしていきたいと思っています。



令和5年度 魚津市教育委員会派遣内地留学研修(外国語活動・外国語)

■期間:令和5年10月1日～12月31日 場所:富山大学大学院実践開発研究科

### 「児童が主体的に取り組める外国語学習」 よつば小学校 <sup>かまち</sup> 蒲地 <sup>りょうすけ</sup> 良介

私は今年度4年生を担当し、外国語活動を指導しています。しかし、「児童が元気に英語を発音できればよい」という、何となく自分が抱いていたイメージで指導していましたが、そんなとき、内地留学の機会をいただき、以前より心に抱いていた「児童が主体的に外国語活動に取り組める指導の工夫」をテーマに研修を進めよう決めました。

研修中は、県内外のたくさんの学校を訪問し、外国語(英語)の授業を参観させていただきました。場所や校種は違うものの、どの先生方も目の前の子どもたちのために一生懸命指導しておられる姿を見て、学年や教科の枠は関係なく、授業づくりで大切なことは共通していると感じました。また、「こんな発問の方法があるのか」「高校ではここまでの英語力が求められるのか」など、たくさんの発見や驚きもありました。そして、外国語教育に関する資料を読みながら、そこに載っている理論と実際の現場で見て感じたことを照らし合わせたり比較検討したりする時間もとても有意義なものとなりました。

今回の研修を通して、各単元目標を達成するためにゴールの姿(言語活動)を示すことの大切さや、コミュニケーションを取る目的や場面を明確にすることで、子供たちは英語で対話する必要感や楽しさを感じながら主体的に活動できるということを学びました。そして今、「子供たちの頑張りを認めること」を常に心がけたいと改めて感じています。他言語である英語を子供が少しでも使ってみようとした姿を見逃さず、認め、励ますことで、「英語で言ってみよう、英語を使ってみよう」という意欲を喚起していきたいと思っています。



# ■令和のとやま型教育推進事業 魚津市の取組報告

## 令和5年度研究構想と取組

### 【共通研究課題】

魚津市の児童生徒の学力向上を目指して

～一人一人のよさや可能性を生かし、多様な他者と協働し、よりよい学びを生み出す授業づくり～

### キーワード

問題発見・  
解決型学習

問題(課題)意識

自己調整

・とやま型学力向上プログラム研修会  
(8月 国語科 二瓶弘行先生)  
・学力向上講演会  
(11月 算数科 細水保宏先生)

大館市(秋田県)との教員  
相互交流(6月・11月)

各校での取組  
魚津っ子学び向上委員会  
・学力向上部会 ・心の教育推進部会

授業のバージョンアップ (授業改善)

## 成果

### 模擬授業形式の講演会から

- ・学びの雰囲気(空気)
- ・対話による課題解決
- ・課題意識の高まり
- ・深い学びへと導く学習過程

体験  
(実感)

### ○学び・気付き(アンケートより)

- ・あんな授業をしてみたい。
- ・モデルとなる授業のイメージができた。
- ・目指す授業が見えてきた。
- ・「深い学び」がどんなものか分かった。
- ・「協働的な学び(グループでの話し合い)」のよさが分かった。
- ・授業改善の方向性が明らかになった。

### 大館市(秋田県)との教員相互交流

- ・校内研修リーダーの育成、校内研修の活性化
- ・大館市授業マイスター公開授業の参観を通し、教師の動き、表情、指示の出し方、板書等を目の前で見て、聞いて、感じる事ができた。

### 各校(個人)での研修、学び向上委員会での取組

- ・児童生徒の疑問を活かした「なぜ～」「どうしてだろう」の課題設定
- ・行動目標「～話し合おう」「～考えよう」から、その時間の学習内容を示す課題への変換

## 今後に向けて

- ・学びを実践へ 授業改善への一歩を踏み出しましょう!!
- ・学校全体で、学団で、学年で、教科で……授業に関する「対話」をしましょう!!



## ■魚津っ子の学び向上委員会の取組と成果

### 学力向上部会



#### 「教頭会」の主な取組と成果

- 「主体的・対話的で深い学び」につながるICT端末を活用した取組の事例、特に協働的な学びの活用例を中心に収集を行いました。また、昨年度集まった事例を実際に利用してもらい、よかった点、改善点が明らかになりました。年間指導計画に位置付ける、単元のどの場面で利用するか、どのような学習課題を提示するかなどを追加し、先生方に使っていただけるよう、事例集をバージョンアップしていきます。また、ICT活用の結果検証のために、教員、児童生徒を対象にアンケート調査行いたいと考えています。
- コロナ禍で中止していた小中間の授業互見を再開しました。先生方には、なかなか時間を取ることができない状況ではありますが、次年度も引き続き互見授業の取組を行っていく計画です。

#### 「教務主任会」の主な取組と成果

- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業づくりにおいて、今年度は「課題発見・解決型学習」を重点として各校で実践しました。学ぶことの喜びや充実感を得ている児童生徒の姿が見られるようになりました。
- 昨年度作成した「ふるさとキャリア教育が目指す具体の姿」を基に、各校で具体的な取組が行われました。今後は地域素材の収集だけでなく、地域との連絡・調整の手順等も記録として残して行く予定です。
- 各校の学力向上を目指した取組の資料の共有、有効活用を行っています。今後活用できる資料を発信していきたいと考えています。

### 心の教育推進部会



#### 「教頭会」の主な取組と成果

- 各校の教育指導計画に「ふるさとキャリア教育 グランドデザイン」を掲載し、周知しました。また、目標の明確化、活動の内容や目的の表現を分かりやすくするなど、より活用しやすいものとなるよう修正をしました。
- 令和7年度末完成を目指し「ふるさと魚津カルタ」の制作を進めています。今年度は読み札の作成を行いました。今後絵札の収集や活用方法を話し合っていきます。
- 「キャリアパスポート」の取組が4年目となり、綴られるものに「ふるさとキャリア教育」の視点が見えるようになってきました。

#### 「生徒指導協議会」の主な取組と成果

- ネットの利用、いじめ未然防止に関する啓発リーフレットでは、市内児童生徒のインターネットの利用の実態やいじめに関する最新情報を掲載しました。4月のPTA総会や懇談会等に利用できるよう、配布時期を早め、早期の啓発に繋げていけるようにしました。
- 魚津市子ども会議では「魚津市子どもの権利条例」を意識し、子供たちが自分の権利として会議を開くことができました。座談会を取り入れ、活発な意見交換の場となりました。今後は、子ども会議後の各学校での取組が活性化されるよう考えていきたいです。
- WEBQUの個票の効果的な活用の共通理解を進めていきます。

### 若手教員研修会

### 参加者（1・2・3年次）15名

今年度の若手教員研修では、受講後、研修から学んだことを2学期に実践し、その成果と課題について報告してもらいました。いくつか紹介します。

- ・ 研修で「個」と「集団」では子供の様子は違うということを知り、意識して「個」と「集団」を見るようにしたところ、様子が大きく変わる児童もいることがよく分かりました。どちらの顔もその子らしさだと、一人一人の児童への理解が深まったように感じました。  
(小学校)
- ・ 児童が気持ちよく1日のスタートを切ることができるよう、また、「学校っていいな」と思うことができるように、朝は注意しないようにしました。そうすることで、自分自身も気持ちよく朝を迎えることができるようになり、児童のよいところに目が向くようになってきたと感じました。(小学校)
- ・ 不適切な行動が見られたとき、即座に叱るのではなく、児童がその行動をとった背景を聞いてから指導するように意識しました。それで、児童の困り感や悩みを知ることができ、指導後も、悩みの解決方法までを視野に入れて対策や対応を考えることができました。  
(小学校)
- ・ 1学期は生徒に直してほしいことばかり指摘し、よいところや評価すべきことをあまり褒めることができませんでした。2学期は生徒のよいところに目を向け、意識して褒めることができたと思います。1学期は様々なことで悩んだが、研修を通して、不安なのは自分だけではないこと、1人で抱え込まずに他の先生方と協力することが大切であること、課題の解決策は多数あることを知り、不安が軽減しました。(小学校)
- ・ 帰りの会における「よいこと見付け」で、具体的なエピソードを話したり相手の行動について自分の思いや感謝を伝えたりすることを促しました。何をどう頑張っていたのかということやどんな行為をしてもらったのかを詳しく伝えることで、他の児童がその様子を想像しやすくなりました。結果として、「頑張っていたね」とか「すごいね」「すてきだね」といったつぶやきも出てくるようになりました。(小学校)
- ・ 頻繁に体調不良を訴える児童について、その背景について以前よりも多角的に考えるようになりました。学習や友人関係、家庭での生活の様子、保護者の様子に異変はないか、ということを考えてしながら児童と面談をしたり、対策を考えたりしました。その際、他の先生方に相談し、一緒に対策を考えたこともよかったです。(小学校)
- ・ 子供同士の関係をよりよくするために、レクリエーションやアイスブレイキングを行う回数を増やしていきました。それで、グループワークでの発言回数や取組方にも変化が見られ、以前よりもクラス全体で協力し合う雰囲気が醸成されてきました。(中学校)
- ・ 担当教科の授業だけでは、生徒の様子を把握しきれない部分があるため、自分の空き時間には、他の教科の授業の様子を観察し、生徒理解を深めました。また他の教員から聞いた授業の様子を生徒たちに伝えることで、生徒との会話が増えました。(中学校)
- ・ 困っているときになかなか教師に言い出せず、一人で悩みこんでしまう生徒もいることに気が付きました。生徒たちの様子を観察しながら、様々な活動で支援をしていくことができたと思います。今後も生徒の心に寄り添い、気持ちを引き出すことを継続していくとともに、生徒が自ら困り感を訴えられるよう工夫していきたいと思っています。(中学校)

研修で学んだことをその場限りのものとせず、実践し振り返る、そこから新たな課題を発見し、その解決に向けてさらに意欲を高めていく。若手教員の学ぶ姿が伝わってくる報告でした。



明治図書 刊

## 生徒指導協議会

本年度の生徒指導協議会の取組として、第17回魚津市子ども会議の運営等にあたりました。子ども会議では、児童生徒が「みんなが楽しく過ごせる学校とは」をテーマとして各学校での取組をプレゼンし意見交換を行いました。後半の全体会は、中学生のアイデアから座談会形式で行われ、中学生の話しやすい雰囲気づくりにより、活発な意見交換の場となりました。

ネットルールに関する取組では、ネットトラブルに関する情報交換を行いました。中学校でのネットトラブルの現状が紹介され、また、小学校の段階でもネットに関する様々な問題が起きている現状を確認しました。対策として学校ではネットルールに関する講演会の実施等の紹介がありました。

小・中学校とも長期休業前にはネットルールについて再度指導したりするなど、定期的に繰り返し指導が必要であることを確認しました。

いじめの未然防止・早期発見・組織的対応では、啓発リーフレットを4月の学習参観・PTA総会時に配布しました。1学期に生徒指導関係の事案が発生しやすいことから早期にいじめやネットトラブルの啓発は有効でした。



## 特別支援教育研究会

本年度より新しく設けられた研究会で、下記のテーマで研修を行いました。

- 第1回「適応指導教室や外部機関との連携について」
- 第2回「1学期の取組に関する情報交換」
- 第3回「就学指導に向けた各学校での準備、手順等について」
- 第4回「来年度の入級予定児童についての情報交換」

第1回、第3回の研究会では、魚津市特別支援教育コーディネーター、魚津市SSW、魚津市SCから研修テーマにそって分かりやすい説明がありました。第2回の研究会では、グループに分かれて各自の取組について各自チェックリストを基に話し合い、振り返りを行いました。

特別支援教育コーディネーター・特別支援学級担任・通級担当等としての役割、相談の準備や手順、相談体制の確立等 自覚と理解が深まる研修となりました。



## 情報教育研究会

11月8日に行われた第2回定例運営委員会では、タブレットを活用した ①授業実践 ②校務での活用 ③活用での課題や問題点について、運営委員が3つのグループに分かれ実践発表と意見交換を行いました。また、年度途中からシステム変更があり、市教育委員会の担当者にも研究会に出席いただき、ハード面・ソフト面についての情報交換を行いました。

タブレット等のICT機器をどのように授業改善や校務の効率化に生かしていくか、研修を進めていきたいと思えます。

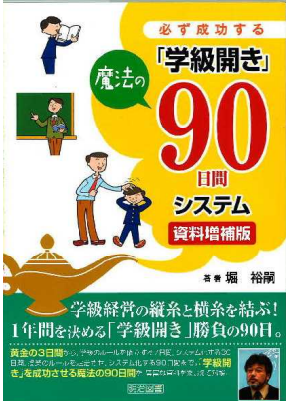




## ■魚津市教育センターからのお知らせ

### 読書案内～今だから本を読もう

魚津市教育センターには「学級経営」「生徒指導」「生徒理解」「保護者対応」など、各分野で参考になるとと思われる書籍、DVDがあるので、一部を紹介します。



#### 中学校 [資料増補版] 必ず成功する「学級開き」魔法の90日間システム 著者 堀 裕嗣 発行 明治図書

「学級開き」は、教師と生徒の初めての出会いの場である。教師は生徒に希望と期待をもたせる場にしたいと願っている。ところが、始業式、配布物提出物の回収等に追われ、通り一遍の指導になりがちである。本書には「学級開き」が成功するための一つ一つの手法が、筆者の提唱する「3・7・30・90の法則」に従って、具体的実践とともに書かれている。筆者は「学級に限らず集団はルールを決めシステムを作らなければ崩れてしまい、学級にシステムを敷くことは“担任対生徒”だけでなく“生徒対生徒”の関係も強固にしていく」と言う。生徒指導から授業のシステム化まで、資料とともに書かれてあるので、ちょうど今の時期に学級・学年経営の成果を振り返り、来年度の指針とするために必要な一冊である。

併せて『学級経営 10の原理 100の原則～困難な毎日を乗り切る110のメソッド 学事出版』も読んでほしい。若手教師はもちろん中堅、ベテランにも必要な「失敗しない学級経営システム」を作るのに必要な方法が一つ一つ書かれてある。教育システムを変えなければできないような「提言」などではなく、日々の現実に即応でき今すぐ役立つものになっている。筆者も言っているように「学校の実態に合わない箇所」もあるが、実践の裏にある「考え方」を読み取ってほしい。



#### 小学校 学級経営がラクになる 聞き上手なクラスの作り方 著者 松尾 英明 発行 明治図書

本書は、「子供が話を聞かない」「学級に落ち着かない」と悩んでいる教師に向けて書かれたものである。「聞く力こそすべての学力の根本」という考えから「聞く」ことにフォーカスして、学級経営がうまくいくための指導の考え方と方法が書かれてある。特に若い教師が、取り入れやすく指導の引き出しが増えるように具体的なフレーズ（例えば「小声」「全員」など）まで考えて作ってある。

筆者は、「クラスが落ち着かないのは教師の心がけの問題ではなく、知識や技術の問題であり、ちょっとした指導のコツを知っているだけでもクラスの雰囲気は大きく変わる」と言う。いきなり第4章「困った場面ではこうしよう」から読んでもよい。クラスにひとりはずい？子にすぐに使える処方箋が載せてある。最後の章では、「学級懇談会」「個人面談」など、「聞き役」に徹することで、うまく乗り切る方法が書いてある。



#### 小・中学校 「豆まき理論」で心を鎮める 時々“オニの心”が出る 保護者との関係づくり 著者 名城大学教授 曾山 和彦 発行 明治図書

長年特別支援学校の担任やカウンセラーとして多くの子供や保護者に関わってきた筆者が、保護者の関わり方について提言した本。「オニの心」（自分勝手な振る舞い）を鎮め「福」（良好な関係）を招くためのアプローチを「豆まき理論」と呼んでいる。筆者の体験に基づいた事例に対して、マンガと文章でアプローチの方法を示している。

しかし、常識を欠いた保護者や苦情傾けた保護者との間で、問題がこじれている場合には、筆者が推奨しているカウンセリング技法やアドラー心理学では対処できない。その場合は、苦情・クレームアドバイザー 関根眞一 著の『なぜあの保護者は土下座をさせたいのか』を読んでほしい。「担任を代えろ」「けがをしたのは学校の責任だから通学時に付き添え」等の脅しに対しても「表面上」の対応ではなく、「一段上」の解決策が示してある。

「ふつうの子」  
なんて、  
どこにも  
いない  
木村泰子

「発達障害」「不登校」  
「問題児」という  
レッテルは、もたらさない。  
朝日新聞、東京新聞、中日新聞など各紙で紹介。

## 小・中学校 「ふつうの子」なんて、どこにもいない 「ほんとのこと」は、親にはいえない

著者 元大阪市立大空小学校長 木村 泰子 発行 家の光協会

『みんなの学校』というドキュメンタリー映画を見たことがあるだろうか。この映画の舞台となった大阪市立大空小学校では、「自分がされていやなことは人にしない」という一つの約束と、「すべての子供の学習権を保障する」という教育理念のもと、「障害のある子もいない子もすべての子供」が、同じ教室で学んでいる。全校児童の1割以上が支援を必要とする児童であるにも関わらず、不登校児はゼロ、モンスターペアレントもゼロである。この映画では他地区で、厄介者扱いされた子供が、まわりの子供たちと「学び」のなかで、成長していく1年間の軌跡が描かれている。筆者が一番大切にしていることは「子供の声を聞く」ことで、学びの場では「人と人は対等である」と言い、45年間現場でそれを実践してきた。子供たちだけでなく、教職員とも「校長先生それはあかん」と言いあう関係ができていた。

本書は子供を育てる親向けに書かれているが、現場で子供と本気で向き合ってきた筆者の言葉ならではの説得力のある言葉の数々である。決して安全地帯にいて「こうしたらうまくいく」調の成功体験話や管理的な上から目線の言葉ではない。「責任は校長一人」という姿勢で取り組んだ筆者の言葉は空々しさやうさんくさは一切ない。真剣な言葉は心にストレートに届く。併せて『みんなの学校』が教えてくれたこと 木村泰子著 小学館刊」を読んでほしい。筆者の言葉の数々が生まれた背景が分かりなおさら受け入れることができる。



## 小・中学校 DVD防災教育シリーズ—釜石の奇跡に学ぶ—

### 命を守る! 避難の3原則 小学生編・中学生編

監修 東京大学大学院教授 片田 敏孝 制作 日本経済新聞社

元旦の能登半島地震によって、遠い世界のものと思っていた地震、津波が、現実となって目の前に現れた。東日本大震災では、釜石市の小中学生は下校時にもかかわらず99.8%が無事だった。「釜石の奇跡」と呼ばれるが、これは奇跡でも何でもなく、地域と学校が一体となって行った教育の賜だった。「奇跡」を生んだ「防災教育」とは何だったのかがわかる教材。「防災の知識」と「避難の3原則」が身に付く。「想定にとらわれないこと」「最善を尽くすこと」「率先避難者となること」の3原則は、いかなる災害にも役に立つ。繰り返し比べられるのは、「大川小の悲劇」と呼ばれた惨事だ。「すぐに高台に向かう」という適切な指示がないまま、児童教職員84人が津波に巻き込まれなくなった。なぜ明暗が分かれたか。

今こそ子供たちの防災意識を高め、自らの命を守る行動を身につけさせる必要がある。

## 「スクールソーシャルワーカーってどんな仕事？」

魚津市スクールソーシャルワーカー はしもと ひでこ 橋本 英子

魚津市は、他の市町村より遅れること数年、2010年に適応指導教室「すまいる」を設立しました。その頃から私は、不登校支援に関わってきました。

子供たちは、様々な理由で、心のコップの不安や不満が溢れてSOSを出しています。受け取る大人の捉え方の違いにより、その傷が時間をかけて深くなってしまい、「不登校」という手段でしか自分を守る方法がなくなった子供たちがここ数年とても増えてきました。「不登校」の状況になると、本人だけでなく、家族、学校の先生方もとても苦しくなります。

教育現場では、個別の支援、心のケアの環境がとても充実してきました。しかし、福祉的な視点の協力者「スクールソーシャルワーカー（SSW）」の認知度はまだまだ低いです。SSWは、子供だけでなく、家族の生活の質の向上とそれを可能にする環境を整えていくために、保護者、学校、自治体へ体制整備の働きがけをしています。

昨年からSSWの仕事をしています。まだ知らない福祉制度や関係機関がたくさんあります。各学校を回り、一人でも笑顔(すまいる)になれたらと願い、勉強する毎日です。

